

# 高等学校「リーディング」における 文学教材を用いた指導の在り方

— 短編小説を活用した授業実践から —

濱口 脩・伊藤 仁<sup>1</sup>

(2003年9月30日受理)

Some Notes on Teaching Literature in “Reading” Classes:  
A Case of Short Stories

Osamu Hamaguchi and Hitoshi Ito

The present study aims at presenting a practical guide to teaching English through literature. Several perspectives are presented concerning what to teach in English language classes, as well as how, and why to adopt literary materials. These perspectives were tested on high school seniors whose attitude toward, and interest in learning English were found to improve through these practices.

Key words: “Reading”, Literary Materials, Post-reading Activities

キーワード: 「リーディング」, 文学教材, 事後指導

## 1. 本稿の目的

本論文の主な目的は、(1)高等学校「リーディング」において文学教材を扱う意義を明らかにすること、(2)文学教材を用いた授業特有の指導法や学習形態についての提案を行うこと、(3)こうした指導の効果を検証すること、の3点である。なお、本研究は筆者の勤務校での授業実践における省察をまとめた研究であり、特定の理論や教授法の有効性を実証することを目的としたいわゆる厳密な意味での仮説検証型の研究とは一線を画するものであるということを断っておきたい。

## 2. 「リーディング」に文学作品を 採り上げる意義

### (1) 学習指導要領における文学作品の扱い

最初に、「リーディング」における文学教材の扱いに関する高等学校学習指導要領の記述を確認しておきたい。まず目標であるが、「リーディング」の科目と

しての目標は「英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」<sup>1)</sup>である。一見すると「情報や相手の意向などを理解する能力」という表現から、書かれた情報を効率的に読みとる能力、言い換えれば「実用的な能力」<sup>2)</sup>を伸ばすことに重きがおかれているようにも思える。しかし、「高等学校学習指導要領解説」(以下「解説」)では「リーディングには、情報や書き手の意向を読み取るという実用的な目的のほかに、読むことそのものを楽しむという目的もある。特に、詩、物語、劇などの文学作品はそのような目的のために読まれるのが一般的である。」<sup>3)</sup>として、「リーディング」において文学作品を採り入れる意義に関する記述もされている。高等学校学習指導要領外国語科の教科としての目標に「実践的コミュニケーション能力」の育成が掲げられているが、「読み」という側面からのコミュニケーション能力の育成のために「読むことそのものの楽しみ」が果たす役割が認められ、その楽しみを与えることに文学作品を活用する意義があるとされていると読みとれる。

<sup>1</sup> 呉市立呉高等学校

## (2) 「読むことそのものの楽しみ」

では、ここでいう「読むことそのものの楽しみ」とはどういったことを指すのであろうか。筆者の考えでは、それは大きく分けて3点あると思われる。一つは文学作品中に用いられる言葉の巧みな使い方、すなわち表現上の工夫を鑑賞する楽しみ、一つはその言葉から想像力を働かせて作品の世界を思い描ける楽しみ、また一つは文学作品で描かれる世界に自分自身を重ね合わせられる楽しみ、言い換えれば作品への共感ができること、ということだと考える。指導にあたって、生徒に文学作品中の巧みな情景描写、心理描写をじっくり読みとらせることで、生徒の想像力を喚起させられると考える。また、作家によってよく練られた表現に接することで、自分自身の日常生活においても言葉を大切にしようとする態度を育むことができると思われる。また、外国語で書かれた文学作品中に表された人間の普遍的な感情に訴えかける内容に、生徒は読む楽しみを感じると同時に、作品の内容に共感を抱くのではないかと考える。そうした機会を与えることは大変大きな意義があると思われる。

## 3. 文学作品を利用する際の留意点

### (1) 教材選定

指導にあたってはまず内容が高校生にとって「読むことそのものの楽しみ」が得られるような教材を選定する必要がある。日頃から生徒の興味・関心や英語力を把握しておき、生徒にとって楽しく、無理なく読める教材を選定する必要がある。

### (2) 教師による事前の読み

第2の留意点としては、教師自身が作品を楽しんで読むことが必要であると考え。教師自身が「読むことそのものの楽しみ」を知らずして生徒にそれを伝えることはできない。小説に限定すれば、物語中の語句の正確な読みとりや表現上の工夫への気づきによって情景を的確に把握したり、登場人物の心情について合理的な解釈を自分なりに用意しておくことが必要である。これを行うには、教師自身に文学を鑑賞するだけの英語力や豊富な人生経験から培われた人間の観察眼・感受性といったものが備わっていることが必要条件となる。

### (3) 生徒一人一人の解釈を尊重する姿勢

第3の留意点は、教師が生徒一人一人の異なる解釈を尊重する姿勢をもつことであると考え。いわゆる実用的な読みとは違って、文学作品の解釈は読み手によって様々であり、可能性としては「読み手の数だけ

解釈がある」<sup>4)</sup>ことを考えれば、教師がこうした姿勢を示すことによって、生徒は自分の解釈に自信をもち、学習意欲が高まると考える。ただし、外国語教育の一環として行うわけであるから、勝手気ままな自由な解釈が許されるわけではなく、あくまで教材である英語の正しい理解というものが前提になった解釈でなければならないことは言うまでもない。

### (4) 多様な学習活動・学習形態

第4の留意点としては、生徒一人一人の解釈を基に班で討論をさせたり、作品に関する感想文を書かせるなど、普段の授業では成立しにくい学習形態や活動を積極的に採り入れることである。前述の「解説」には、文学作品を利用した活動の例として、「英語の表現や物語の展開を鑑賞したり、自分たちが抱いた感想をお互いに話し合ったり書いたりする活動」が挙げられている。

文学作品を採り入れた授業に、とくにこのような活動が適しているのは次のような理由によると考える。班毎の討論に関していうと、前項で述べたように、文学作品の解釈は読み手一人一人で異なる。そこにそれぞれの読み手（生徒）の間に解釈の溝が生じる。溝があるからこそ、溝を埋めるための活動として班毎の討論を行う必然性が生まれてくる。「リーディング」の授業という、ともすれば文法訳読による一斉指導となりがちだが、教師がすべてを教え込むのではなく生徒に作品を鑑賞させることを通して、ややもすれば単調になりがちな「リーディング」の授業形態や指導法に変化をもたせることが必要であると考え。

感想文を書かせることについても同様の理由から特に文学作品を用いた授業においてはおおいに採り入れるべき活動であると考え。

## 4. 実際の授業実践から

以上のような基本的な考え方に基づいた指導の有効性について検証し、授業に対する生徒の反応を今後の文学教材を用いた授業に活かす目的で、筆者の勤務している公立高等学校の第3学年（39名）を対象に授業を実施した。

### (1) 教材について

教材として、*Mainstream Reading Course*（増進堂）のLesson 2 “Patricia”を用いた（APPENDIX 参照）。この作品は、思春期を迎えた同じ近所に住む男女（少年“he”と少女“Patricia”）のお互いに対する微妙な心理と行動を描いた短編小説（491語）である。登場人物が生徒と同世代という設定であることから、生徒に

作品への感情移入をさせやすく、共感を感じながら読ませやすい教材であると思われる。教科書の教師用指導書には本教材の「指導上の留意点」として、「文法的にも文の構造上も複雑で難しいという文はない。青年とパトリシアの気持ちを想像させながら読ませ、二人の関係がどのような関係となっているか、把握させたい。また青年はどんな青年なのか、パトリシアはどんな女性なのか、二人の容姿、性格も想像させたいものである。二人の行動や言葉に、若い2人の心理、ジレンマが巧みに表現されているので、一語一語大切に読ませたいものである。」とある。

## (2) 単元の目標

以上のような教材の特質を念頭においた上で、本単元の目標として

- ① 登場人物の容姿などに関する細かで巧みな描写について、語句の正確な読みとりをさせることによって情景を想像する力を養う
- ② 登場人物の言動の細かな描写を手がかりとして、登場人物の心情について自分なりの解釈ができるようにさせる

の2点を掲げて授業を行った。

## (3) 事前学習

授業では単元毎に予習を課している。生徒に単元の学習の1週間前にプリント（生徒にとって理解が困難であると予想される表現についての解説が載っているもの）を配っている。生徒はそのプリントを参照しながら本文を通読し、できる範囲で日本語訳をノートに書いてくることを求められている。

単元の第1時において、特に単元目標②に関する、予習を終えた時点での生徒の理解度を把握して授業に活かすと共に、授業後の理解度との比較を行う目的で、本文を読む前の段階でプリントによる事前学習を実施した（APPENDIX 参照）。生徒の多くは予習をしていたが、登場人物の2人に関する質問（「登場人物の2人はどのような人物だと思うか」、「登場人物の言動に共感できるところがあるか」）の回答については、2人の微妙な心理が表れている表現を踏まえた上での理解をしている生徒は少なかった。例えば、質問の1「少年はどのような少年だと思いますか。」に対して「ナルシスト」、「自分のことしか頭にない」など、表面的なとらえ方に終わっている生徒が多く、Patriciaへの恋心に揺れる少年の心情に理解を示す生徒は皆無であった。また、質問3「少年の言動に共感できるところがありますか。あるとしたら、どういうところですか。」に対しても、共感を示す生徒はいなかつ

た。また、質問5「少年からのダンスの誘いを、Patriciaはなぜ断ったのだと思いますか。」に対しても、「試験勉強で忙しかったから」や「少年のことが嫌いだったから」といった回答がほとんどであった。Patriciaの葛藤する心情を理解している生徒はいなかった。すなわち、予習の段階で生徒はPatriciaの表面的な言動にとらわれ、その奥に隠された内面の理解に至る読みは不十分であった。

## (4) 指導の実際

単元目標①に関わって特に着目すべき表現として、少年とPatriciaの容姿に関する次の記述を授業でとりあげ、表現されている情景や意味について発問や説明をして理解を深めさせていった。

○ *her hair was black, all the blacker for the glints of brown you could sometimes see in the light.*

これはPatriciaの黒髪を描写した箇所である。光に反射した部分の茶色と対比され、黒髪が一層艶やかに写る様子が目に浮かぶような表現である。この表現については、「同じ黒でも何かと対比した方がより黒さが際立つ」という点に着目したこの表現上の工夫に着目させ、情景を想像させた。

○ *no one ever called her Pat*

これは、日々成長を遂げていくPatriciaの容姿に関する描写の後にある表現である。周囲の者が愛称で呼ぶことが憚られる程の彼女の美しさが伝わってくる表現であると言える。この表現については「この表現は何を表しているか。なぜこの表現がここで必要なのか。」という発問をした。指名された生徒は「大人の女性として成長しているPatriciaを表すため」という妥当な解釈を述べていた。

○ *His voice often surprised him.*

これは、思春期を迎えた少年の声変わりに関する描写である。生徒にとっては“*He was surprised at his voice.*”といった受動態の方が理解しやすい表現であるかもしれないが、あえて「(声変わりしつつある)声」を主語、「彼」を目的語とした能動態にすることにより、自分では統制できない思春期の身体の変容に少年が翻弄される様子がよく表された表現だと言える。指導にあたっては、この文を受動態の文と対比させることによってニュアンスの違いを理解させた。

単元目標②に関して特に着目すべき表現としては、少年とPatriciaの、お互いに対する気持ちの葛藤を描いた次の各表現を授業でとりあげ、意味について発問や説明をして理解を深めさせていった。

○ *The sweat beaded on his forehead*

これは、美容院から帰宅した Patricia のあまりの美しさに息をのむ少年の姿を描いた箇所である。生徒の英和辞典（小学館「ビクトリー・アンカー英和辞典」）には“bead”の動詞の意味・用法は掲載されていない。名詞の“bead”の意味から動詞としての意味を推測させ、更に「汗と人間の心理」、特に「玉のような汗」はどのような状況下で流れるか、について発問し、この場面における少年の狼狽ぶりを想像させた。

○ he retreated soon afterwards. She was too beautiful for him to stay.

これは、Patricia の美しい姿に言葉を失い、思わずその場を立ち去る少年の姿を描いた表現である。生徒に“retreat”の意味を辞書で確認させ、「美しい少女を前にしてなぜ少年はその場を立ち去ったのか」ということについて発問をした。

○ he spent an hour talking with her about a number of things which didn't matter at all.

この表現については、「少年はなぜ関係のない話を1時間もしたのか」についての発問をし、異性への好意をストレートに伝えられないもどかしさについて考えさせた。

○ he said finally

これについては、“finally”という表現に込められた、それまでの少年の、言いたいことを切り出せない鬱屈した心情を読みとらせた。

○ ploy, stratagem

これは、自分のダンスへの誘いをはぐらかそうとする Patricia の言動を指した言葉である。教科書の練習問題には「内容把握」の質問として、“What was Patricia's ploy or stratagem?”という質問がある。この質問では、Patricia が話をはぐらかそうとすることが彼女の意図的な「策略」であったことが前提とされている。しかし、授業ではこれを一歩進め、少年には「策略」と映った Patricia の言動は、はたして本当に Patricia による意図的な策略であったのか、という点を問いかけた。彼からの誘いに思わず赤面する Patricia の姿には、この「策略」という表現は似つかわしくないとされる。ではなぜ、少年の眼にはこの行為が「策略」と映ったのか、その点を問いかけた。

○ He broke in to say, “What about the dance?”

これは、自分のダンスへの誘いになかなか返事しない Patricia に少年が「割って入った」という表現である。この表現から、若い少年のはやる気持ちを推測させた。

○ Would you like to go to the dance with me? の音読

これは少年が迷った末にやっと Patricia にダンスへの誘いを切り出す時の言葉であるが、少年の心情を

適切に表すための音読の仕方についての指導をした。音読のスピードとしては最初は1語1語絞り出すようにゆっくりとポーズをおきながら読んでいき、少年にとって最も緊張感の高まる最後の“with me”に関しては一気に読むことを一例として提示し、練習をさせた。

○ She started to talk about something else.

これは、少年からのダンスパーティーへの誘いに、話をはぐらかそうとする Patricia の姿を描いた表現である。授業では「ダンスに誘われたのにその返事をせずになぜ他のことをしゃべり始めたのか。」と問いかけた。ある生徒は「Patricia が別のことをしゃべり出したのは、少年からの誘いを受け入れたいが照れくさくて話をはぐらかそうとしたのだ」という解釈をしていた。

○ Blushing

これは、話をはぐらかそうとしたが少年に詰め寄られ、赤面する Patricia を描いた表現である。「人が赤面するのはどういった場合か。なぜこの場面で Patricia は赤面するのか。」と問いかけた。「赤面するのは Patricia が少年に好意をもっている証拠である」という意見を出した生徒がいた。

○ If I go with anyone, it won't be with you.

これは少年からのダンスパーティーへの誘いに対する Patricia の断りの言葉である。少年にとってはこれ以上ないほどの痛烈な一言であり、少年は“I see.”の一言だけを残してその場から立ち去ってしまう。ただ、少年から詰め寄られて赤面する姿や、“as though there were no other way of doing it,”（「こうするしかないかのように」）という表現から、このような痛烈な言葉で断るのは Patricia の本意ではないと言える。ではなぜこのような断り方をしたのか、その点を生徒に問いかけた。

○ He was in a funny mood and put a card right down on her knee as she sat close to him.

これは、登場人物の2人がトランプをしている最中、少年が Patricia の膝の上にカードを置いたときの状況の描写である。この表現に関しては、少年の“funny mood”とはどのような気分であるか、という問いかけを行った。「ジーニアス英和辞典」には“funny”の語義として、「おかしな、面白い、こっけいな」の他に「奇妙な、不思議な(strange)」が掲載されている。もし前者の意味で解釈すれば少年の行為は気心の知れた幼友達への面白半分の行為ということになり、後者の意味であれば Patricia を異性として意識した行為であるということになる。ここでは、文脈から判断して、ただ単に面白おかしな気分というよりも、成長する「女性」としての Patricia を目の前にして、自分でもよく分からない「奇妙な気分」になった、という

解釈が妥当であると考え、生徒に意見を求めた。生徒の多くはこの解釈に賛同していたようであったが、ただ、そうした気分が、相手の膝の上にカードを置くという行為になぜつながるのかについては今一步生徒からの合理的な解釈を引き出させることはできなかった。

○ “Don't impose”

これは「奇妙な気分」になった少年が思わず Patricia の膝の上にカードを置いたときとっさに発せられた Patricia の言葉である。教科書の教師用指導書にはこの部分の日本語訳として「押しつけないでよ」という表現があげられているが、この発言は物理的にカードを押しつけるというよりもむしろ、「つけこむ、無理強いする」といった、精神的な圧力をかけるという意味でとらえるのが適当であると考えられる。こうした異性からの身体への接触への違和感といったものに共感を示す生徒がいた。

また、この表現については、音読指導の際に、この場面での Patricia の心情を表すのに適当な音調はどういったものか、という発問を行った。同じ言葉でも、言葉が使われる際の心情に応じて音調は変化するものである。この場面での Patricia の心情としては、少年による突然のいわばセクシャル・ハラスメントに動揺あるいは怒りを感じていた、とするのが妥当な解釈ではないかと考える。では、そのような心情を抱く場合の音調はどのようにあるべきか、という問いかけをして生徒に考えさせた後に、音読の練習をした。

## 5. 事後指導の実際

### (1) 通読後の討論・英作文

授業後に、「Patricia は少年に対してどのような思いを抱いていたか」を主題に 6～7 人の班毎に話し合わせ、意見を 1 つにまとめて英作文をさせた。事前学習の際には「Patricia は少年のことを嫌っていた」というとらえ方がほとんどであったが、授業後のこの作文には、例えばある生徒の “In fact she loved him. She refused his invitation because of her pride.” という作文や “Patricia loved him, because she was blushing when he asked her for the dance.” という作文のように、Patricia の心の葛藤を理解した回答が多くみられた。

また、物語の結末部を班ごとに創作させ、英作文をさせた。普通の授業にグループ学習の形態を採り入れていないにもかかわらずこの活動では活発に意見を出し合い、それぞれの班でユニークな結末を創作していた。ある班による作品を紹介する。

Patricia and he went to the dance party respectively. He was surprised to find her and said, “Oh, Patricia. It's strange.” She said “What is strange?” “Because you said you wouldn't come to the party, but you are here. Why?” “To tell the truth, I told a lie.” “What is it?” “The truth is that I wanted to come to this party.” “Really? Why did you refuse my invitation?” “I was glad when you invited me, but I was too shy to accept it. Now we know we love each other. Shall we dance?”

これは、少年からのダンスへの誘いを断った Patricia が後になってやはり自分は断るべきでなかったと思い直し、ダンスパーティーで少年と再会して愛を確かめ合う、という結末である。この他にも、Patricia にダンスを断られた少年が彼女を見返そうと、自分の妹をダンスパーティーに連れていき、面目を保つといったものなどがあつた。このような結末は、作品中に表された 2 人の微妙な心情の理解に基づいているとは言い難いかもしれないが、どの班の作文も総語数の面で普段の「ライティング」の授業等で行っている自由英作文における語数を大きく上回るものであり、作文をしている最中に細かい表現について教師に積極的に質問するなど、普段にはない積極的な態度が見受けられた。

## 6. 指導の効果

### (1) 単元目標の到達度に関して

登場人物の微妙な心情の理解が授業によってどれ程深まったか、すなわち本単元目標の②の到達度について考察したい。これについては事前学習プリントと事後学習プリント (APPENDIX 参照) それぞれの質問に対する生徒の回答を比較することによって生徒の読みの理解の深まりについて考察したい。プリントの質問の内ここでは特に質問 1～質問 5 に対する生徒の回答を例にとって考察する。

質問 1 と質問 2 に対する回答については、次のような評価基準によって単元目標への生徒の到達度を評価した。

- |  |
|--|
| <p>A (十分満足できる) …登場人物の見方に変化が見られ、言動の裏にある心情を理解している</p> <p>B (おおむね満足できる) …登場人物の見方に変化が見られるが、言動の裏にある心情の理解が不十分である</p> <p>C (努力を要する) …登場人物の見方に変化が見られない、あるいは無回答</p> |
|--|

質問3～5に関しては、

A…本文の適切な読解を基に登場人物への共感の有無あるいは断った理由を述べている
B…共感の有無あるいは断った理由を述べているが本文の読解が不十分である
C…無回答

という評価基準の下に評価をした。表1は質問1～4のそれぞれでAの評価を得た生徒の数の変容を表している。

表1. Aの評価を得た生徒の人数 (38人中)

	事前	事後
質問1 (少年の見方の変化)	1	3
質問2 (Patriciaの見方の変化)	1	4
質問3 (少年への共感)	8	24
質問4 (Patriciaへの共感)	2	7
質問5 (Patriciaが断った理由)	11	16

表1から分かるように、事後学習プリントで記入した「少年に対する見方の変化」及び「少年に対する共感」に関してはかなりの生徒が高評価を得た。生徒の回答には「少年は、最初は気持ち悪いと思っていたけど実は純粋な少年だなと思った」「Patriciaに話をはぐらかされても更に気持ちを確かめようとするところに共感した」など、少年の一途な面、純粋な面への共感を述べたものが多くあった。これは、少年の言動の背後にある微妙な心情への理解を深めることをねらった指導の効果であると考えられる。

一方、Patriciaに対する見方の変化や共感度は、少年に対するほどではなかった。この要因としては、少年の言動はストレートなものであるために生徒にとっては心情が推察しやすい面がある一方で、本心とは裏腹な言動を示すPatriciaについては、生徒にとっては心情を察しづらい面があったのだと思われる。

質問5で問うた「Patriciaが少年の誘いを断った理由」に関しては、事後で深まりのある回答が増加した。事前(予習段階)では「彼のことが嫌いだったから」、「勉強に忙しかったから」等の、特に根拠のない回答や表面的な理解に基づいた回答が多かったが、事後ではそうした回答は減少し、逆に「彼のことを好きだったが強がって断った」、「幼なじみに急に告白されてドキドキして思わず断ってしまった」など、Patriciaの揺れる心を理解した上での回答が増加した。これは授業での指導の効果であると考えられる。

事後学習プリントの質問8に対する生徒の回答につ

いては、「読み手が主人公に感情移入し易くするため」、「同年代の男の子に一般化するため」といった内容が大半を占め、ほぼ理解できていることを示した。

事後学習プリントの質問9に対する生徒の回答については、少年がPatriciaをダンスに誘う時の緊張感あふれる場面や、誘いを断られた時の少年の落胆した心情を示す場面を挙げた生徒が多くいた。ふられた少年への同情を感じた生徒が多い結果であった。こうしたことから、生徒は、本教材を学習者が理解する上で最も重要な箇所となる、少年の心の微妙な動きを読みとったと言えるのではないかと考えられる。

## (2) 文学教材への関心の高まり

文学教材を読むことに対する生徒の関心を把握するために、事後(指導後約4ヶ月後)にアンケートを実施した。生徒に「本年度『リーディング』で扱った教材(全5単元)の内、最も興味深かった教材」を聞いたところ、「Patricia」を挙げた生徒が最も多く(39名中16名)、文学教材への関心の高さを示す結果となった。

## 7. 今後の課題

今回の実践を通して今後の課題として残されたのは、評価の問題である。本単元の目標②については評価基準を設けて「登場人物の心情を推察する力」の評価を行ったが、単元目標①(情景を想像する力)の到達度については客観的で信頼性の高い評価基準を設けることができなかった。今後取り組んでいく必要がある。

また、授業が教師主導になりすぎて、教師による作品解釈を生徒に押しつけた面がなきにしもあらずであった。生徒が作品を主体的に解釈できるにはある程度の英語力が前提になることはいままでのことであるが、教師による過度な説明は生徒の読もうとする意欲までも摘むことになりかねない。この点についても今後の課題としていきたい。

### 【注】

- 1) 文部省『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局 1999 126頁
- 2) 文部省『高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編』開隆堂出版 1999 59頁
- 3) 同上
- 4) 濱口 脩「文学を利用した英語教育 -ヘミングウェイの「雨の中の猫」の教材化の例-」『学校教育実践学研究』第8巻 2002 157頁

## APPENDIX

### Patricia

His fists sank thumping into the heavy bag: a sack he'd filled with sawdust and hung up out in the woodshed because he wanted to get into condition. When he finished his workout he looked at himself in the mirror. He liked the look of hard muscles on his body, the shining sweat.

He liked to look at Patricia, too. She was fourteen, and her hair was black, all the blacker for the glints of brown you could sometimes see in the light. She had clear skin and always a slight flush beneath her cheekbones. Her lips were red and full, but just a little too soft. At fourteen she was an appealing thin, as if she were growing fast while her stomach stayed flat. Her hips were slight and the bones of her wrists and ankles small. She worked hard in school.

He watched Patricia—no one ever called her Pat—as she changed day by day, the whole of her, startling him each time he looked. He was changing, too, and his voice often surprised him. She lived next door and he came to see her quite a lot. They would play cards or play catch with a rubber ball out in the yard. Once, when they were playing Auction 45's in the living room he was in a funny mood and put a card right down on her knee as she sat close to him. "Don't impose," she said, and he took the card away.

One Saturday he came around to her house. Her father let him in. Patricia and her mother would soon be home from the hair-dresser's, though. That was all right. A few minutes later the door opened and Patricia walked in, her hair done up in a high Italian style. He gasped because she was so beautiful, so unassailably beautiful. The sweat beaded on his forehead, and he retreated soon afterwards. She was too beautiful for him to stay.

There was going to be a spring dance down at the school and he thought a lot about asking her to go. One day a few weeks before the dance he spent an hour talking with her about a number of things which didn't matter at all.

"Would you like to go to the dance with me?" he said finally.

She started to talk about something else. Then

he felt flustered, and ruffled, and bothered, by this ploy or stratagem or whatever it was. He broke in to say, "What about the dance?"

He wanted an answer.

Blushing, as though there were no other way of doing it, she said, "If I go with anyone, it won't be with you."

"I see," he said, and left soon after.

He went to the woodshed to punch his sack of sawdust. He didn't go to the dance, and neither did she. The final exams were very close and she, too, had a lot of work to do.

### 事前学習プリント

#### 質問

1. 物語中の言動から判断して、この少年はどのような少年だと思いますか。
2. 物語中の言動から判断して、Patricia はどのような少女だと思いますか。
3. 少年の言動に共感できるところがありますか。あるとしたら、どういうところですか。
4. Patricia の言動に共感できるところがありますか。あるとしたら、どういうところですか。
5. 少年からのダンスの誘いを、Patricia はなぜ断ったのだと思いますか。

### 事後学習プリント

#### 質問

1. 授業で物語を読んだ後、少年に対する見方が変わりましたか。変わったとすれば、どんな点ですか。
2. 授業で物語を読んだ後、Patricia に対する見方が変わりましたか。変わったとすれば、どんな点ですか。
3. 少年の言動に共感できるところがありましたか。あるとしたら、どういう点でしたか。
4. Patricia の言動に共感できるところがありましたか。あるとしたら、どういう点でしたか。
5. 少年からのダンスの誘いを、Patricia はなぜ断ったのだと思いますか。
6. 教科書21ページ15行目 "If I go with anyone, it won't be with you." 以降を自分で創作し、オリジナルの結末を作ってみよう。
7. Patricia は少年にどのような思いを抱いていたと思いますか。英語で書きましょう。
8. この物語の主な登場人物の内、少女にはPatricia という名前が与えられていますが、少年には名前が与えられず、単に "he" としか書かれていません。これはなぜでしょう。
9. 物語中に、印象深かった場面・フレーズがありましたか。どういった意味で印象深かったですか。